「旧約の信仰者たちの手本」　預言者ダニエル②　（11：32～38）

■はじめに

1. 手紙の背景と11章の内容

(1) この手紙が書かれた時期は、紀元64年から66年頃。ユダヤ人の間でローマ帝国に対する反乱の機運が高まる中、愛国主義的な同胞たちから教会に対する迫害が激しさを増していた。一部のユダヤ人信者の中には、迫害を鎮静化するため、いったんエルサレムの神殿祭儀に戻ろうという動きが出始めた。この背教の動きに対して、著者は警告のためにこの手紙を書いた。

(2) 迫害の中で必要とされるのは、信仰による忍耐。この手紙の11章は、信仰による忍耐をテーマにしつつ、旧約聖書に記録された信仰の先輩たちの手本にならおうという内容である。

2. 前回までの流れと本日の内容

(1) 北王国の歴史を概観し、預言者エリヤとエリシャから信仰の手本を学んだ。

(2) 南王国の歴史を概観し、分裂後の王を4代ずつ4期に分けて概観した。最後の第4期は計7人の王が立ったが、世代としては実質的に4代であった。

(3) 南王国の合計19人の王の中で、明確に信仰を持ったことがわかるのは、第1期ではアサとヨシャパテ、第3期ではヒゼキヤ、第4期ではマナセとヨシヤであった。彼ら5人から、それぞれ信仰の手本を学んだ。

(4) 第3期において54年間にわたり活動した預言者＝イザヤ　BC740～686

① イザヤは、預言者としての召命を受けたときに、あらかじめ次のように主から語られていた。イザヤの伝える預言を聞いても民は悟らず、預言の成就を見ても目を堅く閉ざすであろう（イザヤ6：8～10）。

② 人間的な目から見れば、報われることのない54年間である。「のこぎりで引かれ」（ヘブル11：37）とは、第4期に入ってすぐ、マナセ王によってイザヤが殺されたことを指す（聖書に記載なし、ユダヤの伝承）。

③ イザヤの信仰の手本とは、まさに忍耐である。

(5) 第4期において41年間にわたり活動した預言者＝エレミヤ　BC627～586

① エレミヤは、ヨシヤ王の治世第13年に預言者としての召命を受けた。ヨシヤ王は20歳くらい、エレミヤも同年齢であったと推定される。

② エレミヤは、その後、最後の王となるゼデキヤ王の治世が終わり、エルサレムが陥落する年まで、41年間、預言者としての務めを果たした。

③ エレミヤの活動を一言でいえば、「あざけられ、むちで打たれ」（ヘブル11：36）、公衆の前で足かせをかけられて辱めを受けるなど、苦難の連続である。

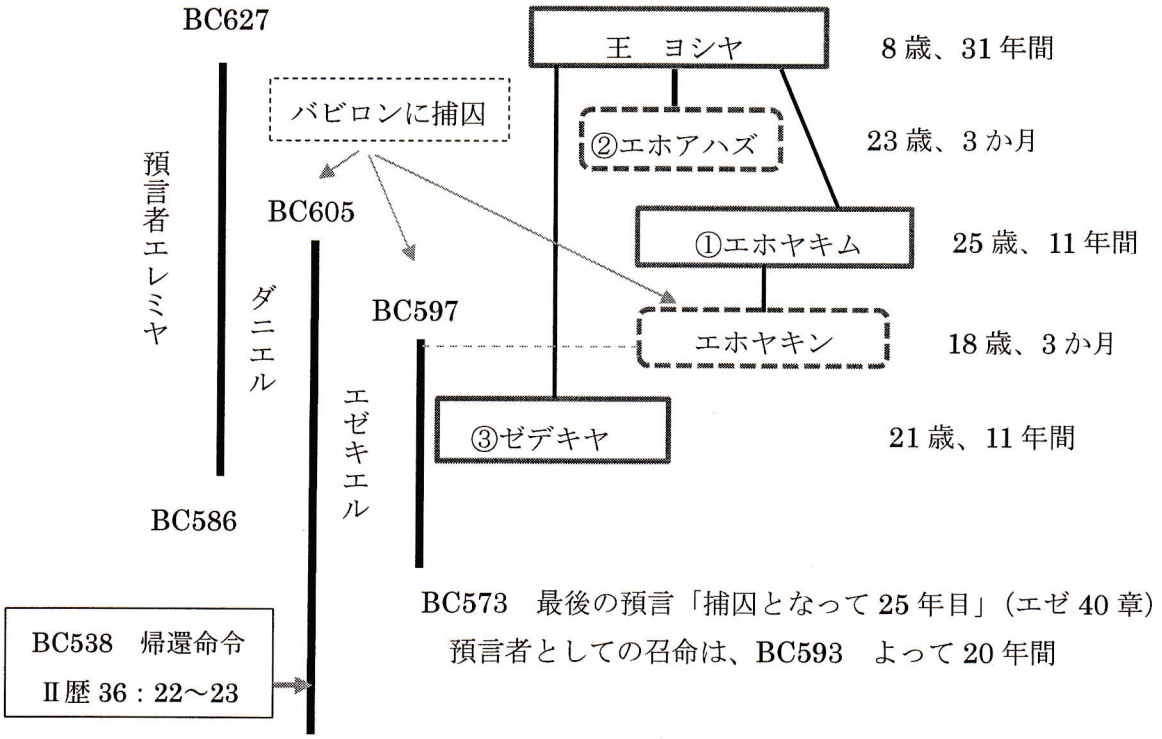
④ エレ1：8、17・・・エレミヤは主から「恐れるな。」と命じられていた。主がともにおられ、かならず助け出されると、主の約束を信じ続けた。彼は、忍耐

の預言者であった。

⑤　新約聖書で、主の兄弟ヤコブは、次のように語る。「苦難と忍耐については、兄弟たち、主の御名によって語った預言者たちを模範にしなさい」（ヤコブ5：10）

(6)　前回は、エレミヤの活動をあらためて振り返りながら、捕囚時代の預言者ダニエルの時代背景を見た。今回からダニエルに焦点を当てる。ダニエルが受けた苦難とそれに対するダニエルの対応を通して、信仰の手本を学ぶ。

□本日の内容　　捕囚となったダニエルがバビロンの宮廷で高位に着くまで



BC536　捕囚から70年目

最後の預言（ダニ10：1～12：13）　ペルシヤ王クロスの第3年

バビロンにいたのはクロス王の元年まで（1：21）。ティグリス川岸（10：4）。

ダニエルはこの預言の後、死んだ。この年、エルサレムでは第二神殿着工。

1. ダニ1：1～6・・・エホヤキム王の治世第3年、BC606年、バビロニヤ軍が侵攻し、エルサレムを包囲した。翌年、第1回捕囚。このとき少年ダニエルたちがバビロンに連れて行かれた。「王族か貴族を数人」、「ユダ族のダニエル、・・・」

2. 第1回捕囚が起きた年は、エレミヤが預言を開始して23年目（推定42歳頃）。BC605年、エホヤキム王の治世第4年、この年、エレミヤは、バビロニヤの支配は70年続くと預言した（エレ25：1～14）。
   (1) エホヤキム王もいったん捕囚になった（Ⅱ歴36：6）が、バビロニヤに忠誠を誓ったので、助けられ、ユダの王に戻った。
   (2) しかし、それから3年後に再び、バビロニヤに反逆した（Ⅱ列24：1）。

3. ダニ1：5・・・エホヤキム王が反逆するまでの3年間は、ダニエルたちにとっては、「養育期間」。

4. ダニ1：8～20
   (1) バビロンの王が定めた食べ物「ごちそう」と飲み物「ぶどう酒」・・・偶像にささげられた肉とぶどう酒であったと推定される（参考　Ⅰコリ8章）。ダニエルは、これを飲み食いすることは、律法に違反することになる、すなわち「身を汚す」（8節）ことになる、と判断した。ダニエルは、宦官の長にその飲食物を避けたいと願った。→　抵抗したり、拒否したりするのではなく、権限を持つ人に願い出た。
   (2) 神は、宦官の長にダニエルを愛しいつくしむ心を与えた。できればそうしてやりたいが、ダニエルたちの顔色が他の同年輩の少年より元気がなければ、王は自分を罰するだろう、と答えた。→「顔色が良くなるのなら、そうしてよい」という示唆。
   (3) そこで、ダニエルは、宦官の長の部下である世話役に、10日間試してくださいと提案した。世話役はそれを受け入れて、実行してくれた。結果は上々、ダニエルたちには、以後、ごちそうとぶどう酒ではなく、野菜と水が与えられた。　→　ダニエルは世話役に提案するときも、自分たちを「しもべたち」と言っている。自分たちの立場をわきまえている。へりくだること、これは信者の基本である。
   (4) 神は、ダニエルたち4人の少年に、知識と、あらゆる文学を悟る力と知恵を与えられた。特にダニエルは、幻と夢を解くことができた。
   (5) 養育期間が終わり、王による面接試験。ダニエルたち4人が抜きんでて優秀であるとの評価を受け、彼らは王に仕えることになった。

5. ダニ1：21・・・ダニエルは、クロス王の元年までそこ（バビロンの王の宮廷）にいた。
   (1) クロス王の元年＝BC538。実に捕囚となってから68年である。
   (2) クロス王は、メディヤ・ペルシヤの2代目の王。初代は、メディヤ人のダリヨス。
   (3) ダニエルは、バビロンの王たち、すなわち、バビロニヤのネブカデネザル王からベルシャツァル王まで、そしてメディヤ・ペルシヤの初代の王ダリヨスに仕えた。
   (4) 2代目のクロス王になったときにバビロンを離れた。その理由は、クロス王による帰還命令（Ⅱ歴36：22～23）に従ったものと推定される。
   (5) 彼は、クロス王の第3年（ダニ10：1）、ティグリス川岸にて（ダニ10：14）、最後の預言を受け取ってのち、死んだ（ダニ12：13）。捕囚となってから70年目。
   (6) 前の年に帰還民の第1陣がユダに戻り、この年、エルサレムで神殿再建の着工。

6. ダニ2：1～49　ネブカデネザル王が見た夢とダニエルによる解き明かし
   (1) 1節　治世第2年・・・Ⅱ列24：12によると、エホヤキン王やエゼキエルが捕囚となった第2回捕囚、BC597は、「ネブカデネザル王の治世第8年」とある。よって、治世第2年は、BC603年頃。ダニエルが捕囚になってから3年目。ちょうど養育期間が終わる頃。
   (2) 1節　「幾つかの夢を見、そのために心が騒ぎ、眠れなかった」・・・夢は何回か見ている。同じ夢を何回も見るので、そのために不安になり、眠れなくなった。
   (3) 2～23節　王の命令「バビロンの知者をすべて滅ぼせ」
   (4) 24～45節　ダニエルによる夢の解き明かし
   (5) 46～49節　王は、ダニエルを高い位につけた